

Special Interview

茨城県知事

大井川 和彦

「新しい茨城づくり」に向けて



昨年、連続テレビ小説『ひよっこ』の舞台になったり、地元出身の稀勢の里が横綱に昇進したりと、明るい話題が相次いだ茨城県。同年夏には、実に二十四年ぶりに新知事が誕生し、話題をさらいました。茨城県政に新風を吹き込んだのは、同県出身で経産省官僚からIT企業の役員へ転身という異色のキャリアを誇る大井川和彦知事です。豊富な行政経験はもとより、IT企業勤務で磨かれた時代のトレンドをキャッチする感性に優れた新知事に、「新生茨城」への熱い思いをうかがってきました。

挑戦のチャンスがあれば飛び込んでみる

●経産省の官僚から今を時めくIT企業の役員を経て政治の世界へと飛び込んで来られたわけですが、ご決断に至った経緯はどのようなものだったのでしょうか？

大井川 私は、政治の世界へ飛び込むことをそんなに特別なことだとは思っていませんでした。

そもそも役所を飛び出した人間ですが、そのきっかけとなったのは、ヘッドハンティングです。

私はもう三十九歳になつていて、ヘッドハンティングをしていた。だいたいの殺し文句が「今、飛び出さないと、後は役所にいた経歴

で、いわゆる天下りみたいな形でしか使われませんよ」というものでした。要するに、天下りは、役所

との人脈だけを頼られて、本質的な会社の中心の仕事は全然やらせてもらえないというようなことを言われたんです。自分の人生は最後まで自分でコントロールしていきたいという思いも強く、じゃあ挑戦してみようと思つて経産省を退官したんです。

退官後、マイクロソフトアジアとシスコシステムズという二つの外資系IT企業を渡つたんですが、それぞれに業績をV字回復させたり、いろいろな実績を残すことができて、自分にすごく自信が付きまして。

シスコシステムズで最後の年に、本社も含めて幹部が総入れ替

えになる中、自分も退陣することになって、今度は従来とは全然違う日本のベンチャー企業で、ニコニコ動画の運営会社として知られる株式会社ドワンゴの取締役に就任することになりました。

ドワンゴはモバイルやゲームのほかに、通信教育の学校を立ち上げるなど、多彩な事業を展開している会社ですが、行った当初は「どうなるのかな？」と思つたりもしましたが、今のところ、人生の中で一番楽しく感じた時期だったという思いがしています。このように、挑戦のチャンスがあった時に、逃げるのではなくて、どん

PROFILE

大井川 和彦 (おおいがわ・かずひこ)

[生年月日] 昭和39年 4月3日 [出身地] 茨城県土浦市生まれ
[学歴] 昭和58年 茨城県立水戸第一高等学校卒業
昭和63年 東京大学法学部卒業
平成8年 ワシントン大学ロースクール卒業
[略歴] 昭和63年 通商産業省(現経済産業省)入省
平成10年 同省シンガポール事務所長(初代)
平成14年 経済産業省商務流通政策グループ政策調整官補佐
平成15年 経済産業省退官後、マイクロソフトアジアに入社(執行役員)
平成16年 マイクロソフト株式会社 執行役常務パブリックセクター担当
平成22年 シスコシステムズ合同会社 専務執行役員パブリックセクター事業担当に就任
平成26年 同社 専務執行役員パブリックセクター事業担当 兼 コマーシャル事業担当
平成28年 株式会社ドワンゴ(ニコニコ動画運営会社)取締役
平成29年 9月 茨城県知事
[趣味] 読書、音楽鑑賞、スポーツ全般(観戦より実践派)
[座右の銘] Where there's a will, there's a way. (意志あるところに道は開ける)





世界の湖沼及び湖沼流域で起きる多種多様な環境問題の解決に向け議論する世界湖沼会議が、今年の10月、日本で2番目に大きい湖・霞ヶ浦を有する茨城県で開催される。茨城県での開催は1995年の第6回以来、23年ぶり2回目。

大井川 最初は自分自身に常に言い聞かせていることでもあるのですが、一つは「諦めない」ことです。最初から諦めずに挑戦しようということ。二つ目は「自ら積極的に変わっていくことが大事なこと」です。それから最後の三つ目は「常識を疑う」ことです。既存の観念や考え方、当たり前で誰もが疑いもしないことに、実は大きな落とし穴ではあります。実は新しいチャンスがあるとか、実は新しいチャンスがあるということが意外と世の中には多くて、そういうことをしっかりと恐れずに見て、考えていくというものです。



例えば、典型的なのが、ばら蒔きです。ばら蒔きというと、誰にでも丁寧に補助をし、手を差し伸べることで、一見、ものすごく公平なんです。でも、私のような民間出身者からすると、全く意味のない税金の無駄遣いでしか

●県政運営にあたって、知事は就任時に、茨城の可能性を最大限に引き出し、新たな活力を生み出すために、さまざまな挑戦をしたとおっしゃっていました。その基になるのが「三つの信念」とのことですが、それはどのようなものなのでしょうか？

大井川 これは自分自身に常に

知事の姿勢を現す「三つの信念」とは

●県政運営にあたって、知事は就任時に、茨城の可能性を最大限に引き出し、新たな活力を生み出すために、さまざまな挑戦をしたとおっしゃっていました。その基になるのが「三つの信念」とのことですが、それはどのようなものなのでしょうか？

この三つが私の生き方であり、選挙戦の時に常に県民の皆さんに自分の信念として申し上げてきました。現状維持圧力の強い茨城県がこれから変わっていくには、この三つが最も必要と考え方というか、生き方、姿勢なのではないかと思えます。それをまさに茨城県の行政の中で実践していけば、最初は小さな渦かもしれないが、いろいろなことが段々と広がっていくのではないかと思えます。

多分、最初は皆、「こんな面倒臭いことを言いやがって。とんでもない知事が来た」(笑)と、そういう反応だと思っていますが、それが段々と時間が経って、皆が逆にこの私に合わせて物考えるようになったりすると、茨城県の行政のスタイルがすごく変わってくると思っ

大井川 和彦



どん飛び込んでみるというのが自分のスタイルになっていました。ドワンゴで仕事をしている間に知事選の話が飛び込んできたんですが、その時非常に仕事が楽しかったもので、どうしようかなという気持ちもありました。ただ、こういう挑戦も人生で滅多にないチャンスですので、駄目だったら頭を下げてドワンゴに戻ろうかな(笑)と、そんな虫のいいことを考えながら、じゃあ、やってみるか、と出馬を決意したんです。

茨城県にとって大事なことは、変わる勇氣

●知事選挙の時のご感想はいかがでしたか？

大井川 最初に一番苦労したのは、元々茨城県は保守的な土地柄で現状維持志向が強いということです。

別に関ののままの茨城県でいいのでは、橋本知事だって悪いことしてやるわけではないんだし、なぜわざわざ変えるの？ そういう声に代表される雰囲気は満ち満ちていて、今のままでやりたいというすごく強い力を感じました。

●前知事の大井川 多選批判に対しては？

大井川 多選批判はあるよう

で、そんなに強くなかったですね。多選と言ったって、後もう一期だろうというようなムードでした。本当に優秀であって、仕事ができるのであれば、多選も県民の選択なのではないかと思えます。

ただ、私は、民間企業と同じで、新陳代謝がないと、必ず何かいろいるものが淀んでしまふと思っ

身は「俺がいなきや」と思っているんだけど、実はそんなことは世の中にはないということを、私は外資系企業で痛いほど経験しています。逆に、人が変われば何とかなりました。世の中ほとんどなんです。

だからこそ、茨城県にとって大事なことは、変わる勇氣や、変えるエネルギーを持つことなんです。そうしないことには、何となく安定した、温暖で豊かな環境のまま、ジリジリと地盤沈下していくんだろうと感じていました。そこにピンポイントで火を点けるのが、私が選挙戦で一番苦労したことですね。

多選批判をしても、県民の皆さんは全く反応しなかったのですが、少子高齢化と人口減少で茨城県はこのままではたいへんなこと

大井川 和彦



ありません。そうではなくて、本当に意味のあるところ、意味のある人だけを、どう選んで、そこに徹底的に意味のある規模の投資をするかという「選択と集中」を考えないと何も変わらないんです。

『プログラミング』と『英語』が必要な時代に

●今までの常識にとらわれない「新しい茨城づくり」に向け、知事は「新しい豊かさ」「新しい安心安全」「新しい人財育成」「新しい夢・希望」の四つを政策の柱に掲げていらっしゃいますね。

大井川 四つのうち、どれが大それた事ですかという質問をよく受けるのですが、この四つがないことには回らないと思うんです。

仮に、東京とか京都に住んでいられる方が茨城に来ていただけるとした時に、きっかけは何かと言えば、豊かさの基になる仕事があるかということですね。そして、仕事があるって住むかどうか決めましょうとなった時に、まず何かから考えるかというと、子どもを育てる学校があるか、きちんとした教育が受けられるかどうかです。そして、安心して暮らせる医療や福祉が整備されているか。そこへ移った後に将

来、自分たちがもつと素晴らしいことになる希望があるかどうかということには、すごく大きいことです。それらのうち、どれが欠けてもうまくいかないだろうと思います。茨城というところを、人が集まってくれよう、いい場所にするために、少しでもよくしていると思うと、この四つは、どれ一つ欠けても駄目だろうと私は思っています。

●そのうちの二つに「新しい人財育成」がありますが、これはどのような政策ですか？

大井川 本質的には、自分で課題を見つけて、自分で考えて、それを自分で解決する能力のある人間を育てなければいけないと思っています。その一番典型的な人種が起業家です。自分で社会的ニーズを見つけて出し、それを提供するビジネスを起して会社を興し、人を巻き込んでいくエネルギーのあるタイプの人間が、これからはどんどん求められてくると思うんです。AI（人工知能）の時代になればなるほど、そういう人をもっと必要になってくると私は強く信じています。

では、そういう人財を育てるには何をしたらいいかというところ、人口の社会的減少を出来るだけ食い止めたかと思っています。新しい企業の誘致や新しい職場づくりをしたり、豊かな観光地をつくらせて交流人口を増やして観光産業を活性化させることで、さらに人が集まったりと、社会的な人口減少を食い止める努力はさまざまやりたいと思っています。

でも、人口の自然減少を一つの県で食い止めるのは非常に難しいことですし、人生観にも関わる話ですので、そこは行政が手を入れるところではないのかなと思っています。結婚のマッチングの努力はしておりますが、それによって人口がどれだけ増えるのかというところ、微々たるものだから、それと人口減少問題が解決できると思

れからはIT（情報技術）なしに全ての社会を語れなくなる時代になってきますので、コンピュータに指示をする『プログラミング』ができる教育環境を整えることです。私はIT業界にいたのでよくわかるんですが、これから、プログラミングは共通言語のようになっていき、このスキルを身に付けているか、否かによって、生涯年収にもすごい差が出る時代がやってくると思います。

もちろん、子どもたちにこれを強制するつもりはありません。今の文科省が定める教育課程で学ぶチャンスがない中で、その外でいから、そういう興味や意欲のある子どもたちがプログラミングを学べる環境を県としてもぜひ提供したいと思っています。

それと同様に「英語」があります。これだけグローバル社会になってくると、ITと一緒に、もう一つ共通言語になっているのは、明らかに英語なんです。どの国へ行っても、一定のレベルの政治家やビジネスマンは皆、普通に英語を喋っています。英語を喋れないのは日本にとつてかなりハンデになっていて、外資系の会社で、日本の重役が本社の重役になれない

えないんです。それよりも、人口が減った後でも、県民の皆さんがどれだけ幸せな生活を送れる環境をつくるかというところに行政の力を置いたほうがいいのではないかと私は思います。また、人口が減ったからといって、必ずしも悲観しなくてもいいかもしれません。日本より国土が広くて、かつ、人口が日本の半分くらいのヨーロッパの先進国なんて幾らでもあるわけですから。

そういう意味では、人口減少即不幸ということではなく、我々自身が変わる勇気を持てば、人口が減った中でも今までの以上の生活が楽しめる、今まで以上の幸せが感じられるチャンスは必ずあると思うんです。これまでと同じことをやらずに、変えるというふうに決めれば、いろいろな可能性が開けてくると私は思っています。

●人口の社会増についての可能性についてはいかがですか？

大井川 非常に難しいですが、諦めずに努力していきたいと思えます。農業を例にとれば、今、茨城県は産出額でいくと、北海道に次いで全国二位なんです。ただし、農家一戸当たりの所得で見た場合は八、九位くらいなんです。そ



は、その典型です。国連やG7などで日本が中心的な役割を担っているのも、こうしたところに原因があります。世界で活躍できる人財をどう生み出すかという布石として、県として英語教育に力を入れていきたいと思っています。

●現行の文科省の教育システムとは別ということですか？

大井川 そうです。文科省の教育システムでは絶対にできないと思います。これからは、全ての子どもをあまねくボトムアップすることだけではなくて、ある意味、英才教育に近いような、伸びる才能をもっと伸ばす努力をしないと、いけない時代になってくるだろうと思います。形としては、課外授業のような感じですね。

そういう発想になったのも、ドワンゴにいた経験からです。そこで「N高等学校」というネットの通信制学校の立ち上げに参加させていただいた。鹿島の臨海工業地帯や、つくばの研究学園都市、日立やひたちなかの日立グループを中心とした企業群があるところで、新しい企業や新しいベンチャーが生まれ始めていて、それらが大きく成長していけば、もつともっと社会的な人口移動が起こってくると思います。さらには、海外からの企業誘致にも積極的に取り組むたいと思っておりますので、その過程で、茨城はどんどん活性化していくと思

●今後の茨城の進化と発展が大いに期待できそうですか？

大井川 そうそう、月刊『茶の間』はお茶の雑誌でしたね。茨城には奥久慈茶、さしま茶、古内茶（ふるうち）という「三大銘茶」があるんです。この前、この三大銘茶に「いばらきイメージアップ大賞」で奨励賞を出しましたので、ぜひPRさせていただきます。それぞれ非常に特徴のある、おいしいお茶ですので、よろしく願います。